公開講演会記録

中国ウォッチングこぼれ話Ⅱ

翻訳業、日本語講師　上松玲子

『善隣』誌で「中国ウォッチング」を担当させていただいて、30年以上になります。長きにわたりご愛読いただき大変ありがとうございます。

最初は手書きの原稿を郵送していたものが、ワープロになり、ファックスになり、電子メールになりました。２００６年に上海滞在を始めた頃には原稿はＥメールで送るようになっていて、資料の方は紙媒体とインターネットの配信ニュース半々でした。まだ街角に新聞スタンドも多くありました。それが約10年の滞在の間に、スマートフォンの急速な普及により、紙媒体は影が薄くなり、人々はスマホでニュースを見るようになり、各新聞社のデジタル版やニュースサイトも充実しました。新聞機構の再編、統廃合や組織改革も進みました。現在は中国ウォッチングの原文資料はインターネットからの新聞のデジタル版をもとにしています。今年の８月に上海に行きましたら、新聞や雑誌を売るスタンドは見当たらなくなっていました。

私が「中国ウォッチング」を担当させていただくにあたって、最初にいただいたご要望は「中国の市民の生活や感覚が伝わるような記事を紹介してください」ということでした。これまで30数年間いつもこのことを念頭に置いて記事を選んできました。進学、就職、結婚、子育て、転職、昇給、環境、医療・介護、退職後の生活など、生活者の目線で、切実で共感できる話題をお届けしたいと思ってまいりました。最近は、伝統文化や紀行など行ってみたくなるような情報も極力取り上げようと思っております。現在日本語講師をしておりますが、中国からの学生と接するとき、また中国の友人と接するとき、このことが彼らの考え方や行動、日本に対する疑問の背景を理解する上で大変役に立ちました。読者の方々も同様であることを願っております。

上記を大前提として、記事選択にはいくつかの原則を決めています。第１は中国国内の新聞社や通信社の配信したニュースであること、第２は数値などに矛盾がないこと、第３には詳細や背景がある程度わかるまで少し寝かせることです。

表は『人民日報』のインターネットサイトである「人民網」の調査による、新聞社のランキングの一部です。ランキング

の基準は少し複雑で、紙媒体の発行部数やニュースアプリのダウンロード数、人気投票などから点数化したものです。「中国ウォッチング」の中で、よく目にされる名前が並びます。ただし、23位の京華時報、29位の北京晨報、35位の法制晩報は休刊になっており、時代を物語っています。現在はそれぞれの新聞社がインターネットで独自の総合ニュースサイトを展開しており、自社新聞のデジタル版や新聞紙面をそのまま掲載していたり、他社の記事を転載したりしており、無料で見ることができます。

表　新聞伝播融合メディア100強　2016年「人民網」

1．人民日報	10．経済日報	19．武漢晩報	28．法制日報
2．環球時報	11．新民晩報	20．解放軍報	29．北京晨報
3．参考消息	12．揚子晩報	21．楚天都市報	30．鄭州晩報
4．広州日報	13．中国青年報	22．広西日報	31．長江日報
5．羊城晩報	14．華商報	23．京華時報	32．遼瀋晩報
6．光明日報	15．毎日経済新聞	24．深圳晩報	33．銭江晩報
7．南方日報	16．新京報	25．新快報	34．山西晩報
8．南方都市報	17．北京青年報	26．華西都市報	35．法制晩報
9．大河報	18．中国日報	27．人民日報海外版	36．四川日報

これら新聞社のほかにも通信社である新華社、中国通信社もそれぞれ、新華網、中新網というサイトを展開しています。人民網と新華網は内容は中国国内と同じではありませんが外国語のサイトも運営しており、日本語もあります。また、「新媒体」と言われるインターネット情報サービス会社は、主なものでは、新浪、騰訊（Tencent）、搜狐、網易などがあり、日本で言えばYahooのようなものですが、そちらのニュースサイトも広く閲覧されています。

日本も含め世界中に中国語で発信されているニュースはありますが、「中国ウォッチング」で扱うのはあくまでも所謂大陸の政府公認のニュースです。そこには「それ以上」のことは書かれていないかもしれませんが、読み取り方次第でいろいろなことがわかります。以前に比べれば、多種多様なニュースに手軽に触れることができ、内容も踏み込んだものが増えました。そして、さらに言えば大多数の中国の方が日常触れることができるのは、それらのニュースだということです。中国で海外のBS放送が突然中断することは知られていますが、インターネットの世界でも、私が滞在した２００６年以降、少しずつできないことが増えていきました。海外の友人や情報ソースには繋がりにくくなりました。もちろん中国の方が「長城」と呼ぶその壁を突破する「方法」はあるのですが、誰でもできることではありません。ある日突然LINEが使えなくなったので、WeChatが主流になり、ツイッターやインスタグラムの中国版もできました。２００９年に開始された中国版ツイッターの先駆け「飯否」などは、不適切な画像の拡散をコントロールできなかったため、閉鎖されました。その後台頭した新媒体では管理が適切に行われていることは推して知るべしです。実際、現在中国ではデマに対する取り締まりが強化され、人々がパニックになるようなデマを流すと治安管理処罰法により「行政拘留」され、ＳＮＳのアカウントもすぐに削除されます。そういう不自由さというものは、その中にいると、案外順応するものです。また私見ですが、ニュースの読み方にしても、人々はそこから何をくみ取るか、裏を読むということに長けているのではないでしょうか。中国ウォッチングも少し斜めに読んでみると、違う景色が見えるかもしれません。

サイバー空間に漂う記事は転載の過程で少しずつ編集され省略されます。実は

中国ウォッチングの記事は編集の前に原文を検索し、内容や数値などを確認した上で、誌面のサイズに合わせてかなり枝葉を落としてご紹介しています。多くのトピックスを伝えられるほか、所謂ヨイショの部分や、お題目の部分、わかりきったことや繰り返しをそぎ落としてすっきりできる反面、背景説明が十分できないことや、原文の面白みを伝えられないのではないかという悩みがあります。たとえばよく関係者の意見や感想として「」で引用されたことばは、生き生きと感情が吐露されていることが多いのですが、残念ながら割愛せざるを得ないことが多いのです。翻訳者としてそこをどう補い、文章の味を残していくのかは永遠の課題です。

ここからは、最近の気になるトピックスについてお話しします。際限がないので交通事故や刑事事件は扱わないことにしていますが、最近の傷害事件の中で気になることがあります。それは、子どもたちが無関係の者に襲われる事件が多発しているということです。２０１６年12月16日付、人民網輿情監測室はこの年全国で26件の児童、生徒が狙われた傷害事件があったと発表しました。その際、その年11月の陝西省漢中市での事件については「社会報復を理由に」という表現が使われています。２０１８年４月に陝西省楡林市で28歳の男が過去のいじめを恨み母校の無関係の生徒たちを刃物で襲った事件では９人もが犠牲になり、約３か月後に死刑判決が下されました。昨年、地方から上海に出て来たばかりの男が小学生を襲った事件は、日本でも報道されました。つい最近でも９月２日湖北省恩施市で８人の生徒が地元の男性に襲われ死亡しました。注目すべきはこれらの事件の情報は地元公安局の公式ブログで事実のみ淡々と伝えられていることです。昨年の10月重慶市の幼稚園での事件では被害や動機について大げさな情報を拡散したかどで、３名が拘留されたということで、こうした情報の出し方について当局が神経を使っていることがわかります。競争社会、格差社会の中で心を病む人たちがいるというのは、多くの国に共通する問題です。これらは決して他人事ではないと感じられます。

格差という言葉は前回15年ほど前にこちらで「こぼれ話Ｉ」としてお話させていただいたときに、今後注目していきたいキーワードとして提示したことを覚えています。上海の同じ企業で働く同い年の若者の例です。かたや資産価値数億円のマンションを２軒親から受け継ぐ予定で、部屋に専用棚を設けて棚いっぱいにコレクションを飾る上海出身の若者がいます。一方で地方出身の若者は、少ない地方出身者枠の獲得競争を突破して上海の大学に進学、アルバイトをしながら卒業、苦労のかいあって上海で就職できました。今は郊外のウナギの寝床のような単身者用賃貸アパート暮らしですが、いつか起業することを夢見ています。このような生まれたときからの気が遠くなるほどの格差には、胸が痛くなります。もちろん、地方出身者にも大都市をちょっと体験しに来た「富二代」もいるし、上海の人にも苦労人はいますが、一線都市から二線、三線都市へ豊かさはちゃんと伝わっているのかと心配になります。

もう１つ私が関心をもっているトピックスは情報の問題です。情報の管理とデマの取り締まりについては前に述べました。中国で暮らしていて実は至る所に監視カメラが存在していることを知りました。個人認証技術も進んでいます。またキャッシュレス決済、特にスマホを使うＱＲコード決済が普及していて、スマホと充電器さえあれば出かけられます。店の銀聯カードの読み取り機は埃をかぶっています。

不正アクセスもないわけではありませ

ん。居眠り中に手をとられて指紋認証でスマホを開けられ、口座から有り金を勝手に送金された事件もあったそうで、虹彩認証や顔認証などの技術や、二重の認証が普及しています。子どもたちの金銭感覚がおかしくなっているので、教育やシステム改善が必要と言われています。目下私の一番の関心事は今や私がいつ、どこへ行き、どんな消費をしたのか、誰と会ったのか簡単にわかる社会だということです。一人一人のデータの蓄積、即ちビッグデータが世界で最も大きいスケールで蓄積されているということです。この情報を握った者は大きな力を持ちます。世界中の人がそのデータに大きな関心を示すでしょうし、この力は使いようによっては人々に大きな幸せをもたらすと同時に様々な問題も危惧されるところです。

「失信被執行人」、俗称で「老頼」と呼ばれる人々がいます。履行能力がありながら、法律上の義務を果たさない人々です。例えば税金や罰金を払わない人、ずるをした人について裁判所がそうと認定すると、失信被執行人の名簿、つまりブラックリスト「黒単」に入れられ、官報や裁判所のホームページで氏名と身分証ナンバーを公開され、検索することができます。そうすると高額な買い物ができなくなり、出国はおろか、飛行機にも乗れなくなります。個人の場合もありますし、法人や団体の代表としてブラックリストに載ることもあります。今問題になっているのはこれを解除、あるいは訂正する手続きの問題です。何をするにも本人確認があるわけですから逃げようがないのです。日本もいずれ歩む道かもしれません。皆さんはどう感じますか。不正をしたのだから因果応報でしょうか。ある朝起きたら、身に覚えのない負債を抱え、ブラックリスト入りしていたらなんて想像したら、小説が書けそうですね。

小説といえば、ニュースカテゴリーの中に大抵の新聞には「人物」というカテゴリーがあります。歴史上の人物の外伝のようなものもありますし、一般人のときもあります。ドキュメンタリーやドラマを見るようで大変興味深いのですが、何しろどれも長いので、通常『善隣』誌面でご紹介することができませんので、今日はいくつかご紹介させていただきます。

1. 銭仁鳳の新生活

２００２年雲南省巧家県の県城で保育士をしていた銭仁鳳は幼稚園での毒薬事件の犯人として無期懲役の判決を受けた。２０１５年末、雲南省高等法院は再審の結果、事実関係が明らかでなく証拠不十分として無罪を宣告した。

無罪釈放になり、国家賠償を受け、新しい仕事につき、社会に溶け込んだ彼女は、今般結婚するに至った。生活の再建には慶びや期待とともに恐れがある、と彼女は言う。失った人生を取り戻すためには、他人の百倍の努力をして１分も無駄にできない、という切迫感がある。

婚礼の日20人の親戚が夜通し車を運転してやってきた。記憶では姉たちが嫁ぐとき、父は職人を呼んで箪笥をあつらえていたが、父も80を過ぎ、遠くから来ることもあり、家具は省略したようだが、故郷の特産品の美食を持ってきてくれた。兄は30キロもあるハムを送ってくれた。

弁護士の楊柱も昆明から来てくれた。再審請求から国家賠償まで世話になった彼に結婚の証人をお願いしたのだ。

17歳で獄中に入り31歳で釈放された彼女は、普通なら恋人と過ごすはずの青春を失ってしまった。姉妹たちにはすでに10代の子どもがいて花嫁の付添人は頼めない。結局自分が小さい頃あやした姪にお願いした。彼女が投獄されたとき４歳だった姪は今年20歳になった。

仁鳳は小学校５年生のとき、家庭の経

済的事情で学校に行くのをやめ、14歳であこがれの県城に出稼ぎに出て、保育士になった。子どもたちに囲まれた楽しい日々、そして、服役中の静寂の中で、雨の音を聞きながら味わった孤独を思い出す。収穫前の雨の中、水田で働く両親が目に浮かんだ。釈放後は以前に増して静寂が好きになった。新しい仕事は広州市の郊外の村だ。平日皆が工場へ行った後、1人で宿舎を管理する。安全だと実感する時間だ。

しかし、この日の婚礼の賑わいは彼女のものだ。友人の歓声の中、新郎は彼女を抱いてホテルの3階から一歩一歩1階のロビーに降りていく。夫の足が震えているのに気が付いて、彼の汗ばんだシャツにしがみついたその瞬間、奪われた青春が戻ってきたような気がした。

赤い婚礼衣装に身を包んだ彼女を皆が「きれいだ」とほめたたえる。２０１５年に釈放された日、赤い綿入れを着て車で7時間かけ故郷に帰った。赤い色は十数年の不幸を払うかのようだった。しかし、それ以降彼女は同僚に勧められても鮮やかな色を着ない。自分には相応しくないような気がするからだ。

この県では結婚後の女性は「姑娘」と呼ばれる。故郷の巧家では未婚の女性だけが「姑娘」と呼ばれる。故郷で「姑娘」と呼ばれる日々を失ってしまった自分が、この地でこれから「姑娘」と呼ばれるようになるのだと思うと不思議な気がした。

司会者に普段の呼び方で花嫁を呼ぶように促された新郎が、「小鳳」という故郷での愛称で彼女を呼び、故郷の父が小鳳の手をとって新郎に渡したとき、新郎は彼女の苦難の道と、結婚に至るまでのあれこれを思って感極まった。

釈放された日、家に戻ると、待ち受けていた親戚に結婚相手を紹介された。国家賠償金１７２万３千元が確定すると、弁護士の楊先生のもとには新疆、黒竜江省、雲南の各地から彼女の世話をしたいという電話がかかってきた。

小さい村では彼女のような年齢の女性はとっくに結婚し、子どもをもうけている。自分は恋愛の経験すらない。人目にさらされる生活から逃げたいと彼女は感じた。14年の牢獄生活が彼女を強くしていた。

旧正月が終わると彼女は広州郊外に働きに出た。そして友人の紹介で警察署で事務をする新郎に出逢った。初めは公安関係の人と会うのに抵抗があった。彼はスマホの使い方や、航空券や鉄道の切符の買い方も一つ一つ教えてくれた。彼女の好物と聞いて、来るたびにリンゴをたくさん持ってきてくれた。家族や彼女の担当記者たちは金目当てで騙されているのではと心配した。彼女自身も何度も「お金が目当てなのか」と彼にぶつけた。しかし、彼はいつも彼女を受け入れ、寛容さと細やかな心遣いをみせた。結婚を決めたのは些細なことだ。ある日のデートの帰り道、まだ家に着く前に、「無事着いたか」というメールをくれたときだ。

２０１７年9月彼女は成人教育機構で人事管理を学ぶことにした。3年間働きながら懸命に勉強した。試験では70点から80点はとったと新郎は自慢する。服役のとき、彼女は小学5年生の学歴しかなかった。獄を出たとき、彼女は激変した社会に呆然としていたと楊弁護士はいう。

実は彼女は獄中では縫製の助手から始め、5年間でプレスから複雑な縫製もこなす縫製工になった。３００人の中で10人しか合格しない技能資格もとった。獄中で知り合った人は資格を生かさないのはもったいないと言うが、彼女は縫製の仕事をしたくなかったのだ。

彼女は変わった。会社で生き生きと働く若い社員を見て、私も自分の力を生かして好きな仕事がしたいと彼女はいう。

（『新京報』２０１８年3月27日）

2．余元　私の零消費生活

The Bulk houseという名の無駄ゼロ、無包装の店に入ると開店前の店内で余元とイギリス人のボーイフレンドJoeは灯りもつけず忙しく働いていた。

ショーウインドウに並ぶ2つの500ccのガラスの容器には2人がこの3か月に出したゴミ、ラベルや糸などが入っている。

透明なタンクにはノンシリコンの無添加シャンプーが入っており、その横にきれいに洗ったガラス瓶が並ぶ。容器を持たずに来店した客用だ。壁には余元がプロデュースしたステンレスのストローやコップ、食器など環境に優しい商品、再生材料でつくった袋類が並ぶ。

4年前の余元は武漢の外資系会社で働いていた。多くの女性と同様、買い物狂いで、新しいものを買うと旧いものは全部捨てた。洋服や靴、化粧品、それに生活用品に毎月の給料のすべてをつぎ込む「月光族」だった。やがて気が付いたのは、毎月買い物で欲求を満たしながらも結局は他の人と自分を比べているばかりで、充実感もなく、楽しくもなく、ただ負担に感じているだけだということだ。

彼女はまた強迫性障害だった。毎朝着ていく服が選べずに遅刻しそうになった。そんなとき動画で見たのが、2人のアメリカ人が物のない部屋に住む様子だった。彼らは本当に必要なもの以外は持たない。シンプルこの上ない生活だった。そして自分もそんな生活がしたいと思い始めた。

2016年、大家に突然、立ち退きを迫られる。仕事やプライベートで忙しく片付ける時間もない。部屋はエレベーターもない6階で引越しも大変だ。物に束縛される日々、片付けからも大家との面倒なやりとりからもすべて解放される決定を下した。物を捨てることにしたのだ。

新居に移った彼女は気が付いた。物が減り、片付けや物を探すのに時間がとられなくなった。朝もすぐに出かけられる。身も心も軽くなった。服も少なければどれを着るか悩む必要もない。ザッカーバーグのような成功した人のライフスタイルにも影響を受けた。生活をシンプルにして、本当に大事なことに集中することこそが成功の秘訣だとわかった。引き算をしても生活の質は落ちるどころか、逆に内面が充実していくのが感じられた。

Joeと出会ったのは4年前とあるホームパーティーでのことだ。「私たちは価値観が同じなの。2人とも好きでもないことを自分に嘘をついてまでやらない。自分の内面を充実させてそれを行動に移すの」と彼女は言う。文化的な背景は違うが、お互いに影響を受けてだんだん変わってきたという。「零消費」は彼女が始めて、1年後に彼が加わった。Joeは中国で会社を持っていたが、今は2人ともこの仕事に専念している。

「彼はこの事業が多くの人に影響を与えることだと考え、人や環境のために役に立ちたいとすべてを注ぐことにしたの。中途半端なことが嫌いな人だから」。

余元はいつも素顔、防腐剤や化学品を使わない自家製の化粧水を使う。2人で零消費行動をすると決めたときからルールを決めた。食品のテイクアウトはしない、ペットボトル、レジ袋は使わない。外食をするときは自分の箸やスプーンを持って行く。使い捨て容器を使わない食堂を選ぶ。ラップで包まれた食品は買わない。夕飯は自炊を心がける。野菜くずは冷蔵庫で保管し、まとめて肥料にする。

三源里の市場の叔母さんたちに彼女は有名だ。彼女の行動を理解できない人に対しては、彼女は言葉ではなく行動で示す。マイバッグに入りきらない胡桃を、シャツを脱いで包んで帰ったり、卵を2つ手で持って帰ったり。「時間の無駄だなんて思わない。運動になったし、新鮮な空気も吸ったし。目標は1つです」。

このように、彼らはいつでもどこでも、使い捨てのプラスティック製品を使わないように想像力を働かせる。マイバッグやマイボトルを持ち歩き、なるべく中古品を使う。そして店で、他の人たちがどうしてもほしくなるものだけを過剰な包装なく、提供したいと考えている。「できれば、量り売りで油や酢などの食品を売りたい。お客は瓶を持って買いにくるの。父や母がそうしていたようにね」。

朝早く起きて、シャワーを浴び、果物を食べ、ストレッチとヨガ、瞑想をした後、Joeと2人で自転車で店に行く。「地球上でもっとも偉大な国はね、あなたの想像力Imaginationよ」と彼女はかみしめるように言った。店を出てきたとき、鼓楼の向かい側の財神廟が太陽に照らされ黄色の瓦が輝いていた。その瞬間、発展と伝統の交錯する美しさを感じた。

（『北京青年報』２０１８年12月７日）

３．小都市の消費を押し上げるのは

私の実家は湖南省の北部の三線都市だ。人に実家はどこかと尋ねられたときは、「常徳」と答えた後に必ず「小さいところですよ。聞いたことないでしょう」と付け加える。常徳から「富裕」「発展」を連想する人はいないだろう。

常徳の平凡さは庶民の生活からも見て取れる。我が家では麺を茹でた湯で食器を洗い、野菜や手を洗った水でトイレを流す。トイレの水道管は使ったことがないのでいつからか動かない。家の調度品は更新されず、大抵のものが９歳の飼い犬よりも長く家にある。スリッパはその犬に噛まれてぼろぼろのままだ。このような倹約の習慣がある我が家だが、今年正月に帰省したら、なんと母は洗濯機を買い替えていたのだ。代金２０００元は北京では７平米の部屋の１か月分の家賃にすぎないが、母にとっては大金だ。街も変わった。一線都市に倣う傾向にある。デパート２階の婦人服フロアには以前は北京のショッピングセンターにしかなかった有名ブランドが店を構える。シャツやデニムパンツなど安いものでも５００元以上、セーターは１着２千元という値段でも客があふれている。

しぶしぶ試着を始めた母は、どうやらコートとパンツ合計１１００元の服が気に入ったようだ。タクシーも乗らない母をどう説得しようかと考えていると意外なことにすんなり母は購入を受け入れた。

祖母の家で正月料理を囲んでいると、叔母から部屋をリフォームしたと聞いた。叔母は大枚をはたいて居住環境を改善したのだ。母の洗濯機よりも驚きだ。

祖母の家は父が育った地域で、私の実家武陵区から80キロの安郷にある。常徳は豊かなところではなく、郊外はさらに経済レベルも低く、庶民の生活はつましい。

年越しのご馳走は鶏の煮込み、蒸し魚、豚足の煮物、白菜炒め、タケノコ炒め、蒸し卵など十数種類、材料も含め自家製だ。鶏を飼い、池で魚を飼い、数ムーの畑で白菜やダイコン、ニンジン、トウガラシなどを育てる祖母は86歳だ。私たちはお金を出すからもう農作業は止めて食材は買ったらどうかと勧めているが、祖母は同意しない。正月にリンゴや牛乳を箱で買って行くが、帰りには白菜やダイコン、米、豆腐を袋で持って帰ることになる。

叔母の家の近くにスーパーはなく、市場も遠い。それなら、多めに買っておけばいいものを八角茴香を買うのにさんざん迷って１元分だけ買う人だ。

叔母は実はこの10年孫たちの世話のために農村を離れて北京で暮らしていた。今年引退して故郷に戻ったのだ。そして農作業にかかる前に家をリフォームしたのだ。わたしは叔母はやはり一線都市の洗礼を受けてよりよい生活を追求することを学んだのだと感じた。

温かいシャワー、暖房付の浴室、エア

コン、電気暖炉、冷蔵庫など都市生活には欠かせない設備も農村にお目見えするまでにはタイムラグがある。子どもの頃は春節に祖母の家に行くのがつらかった。当時は高速道路もなく、車で半日かかった。ガソリンスタンドのトイレは水洗でなく、ドアもなかった。2つの穴の間に低い衝立があるだけだった。だが、祖母の家のトイレはもっとひどかった。肥溜めの上に丸太を何本も渡したものだった。

トイレがこうだから、シャワーなど贅沢なことだった。祖母の家には我が家3人用の洗面器があるだけだった。中学になって叔父の家にシャワーができてやっとシャワーを浴びられるようになったのだ。昔の洗面器は今でも祖母の家にある。

今はすべてよい。高速道路ができて祖母の家まで2、3時間で行ける。途中のサービスエリアは現代的な設備でトイレももちろん個室の水洗トイレだ。祖母の家にもトイレや暖房付のシャワールームがついた。木を燃やして暖をとった時代は去った。父はストーブや暖房付テーブルを買い、寝室でテレビを見られるようになった。去年はエアコンも買った。もう帰省がつらいと思わなくてもいい。

三線都市にも消費レベルアップが起きた。しかし、貧しい日々から過ごしてきた老人たちは1元を2つに分けて使うことに慣れている。

10年前に叔母に孫娘が生まれようというとき、従兄は地元で育てられるようにと屋根瓦を替え、冷蔵庫や洗濯機、エアコンを買ったのだが、孫は北京で育てることになった。叔母が北京から戻り、北京から遊びに来た甥っ子のためにエアコンをつけようとしたら、中をすっかり鼠にやられていたそうだ。洗濯機に至っては叔母が節水と節電のために使わないものだから、埃をかぶったままだった。

祖母の家のエアコンも同様で、酷暑だった去年の夏、若い人が来るからと付けただけで、その後は電気代がかかるから使っていないという。

北京の従妹は怒って叔母に新しい冷蔵庫と洗濯機をネットで買って送った。洗剤や牛乳も買って送った。これからは重い生活用品はネットで買って送るつもりだそうだ。

母とはまだやりやすい。この2年、電動歯ブラシや掃除機、高級化粧品などを土産に持って帰った。母は無駄になるよりはいいと受け取ってくれた。今年は買い物中に600元のバッグを気に入ったようだったが、もったいないと買わないで帰ったので、こっそり私が買って渡したが受け取ってくれた。

この三線都市で消費を押し上げているのは大人たちの覚悟ではなくて、子どもたちの愛なのだ。

（『新京報』2019年2月10日）

いかがでしょうか。同じ国、同じ時代にかくも多様で愛すべき人間模様が繰り広げられているのです。

来年には、「二零後」（2020年代生まれ）の子どもたちが誕生します。これからも変化する中国社会の中で、人間ドラマが垣間見える記事を紹介していきたいと思います。そのことが、少しでも相互理解につながれば幸いです。ご静聴、アンケートのご協力、激励、ご意見ありがとうございました。

（2019年9月26日・公開フォーラム）

筆者略歴（うえまつ　れいこ）

『善隣』「中国ウォッチング」編・訳者。東京外国語大学中国語学科卒業。商社勤務を経て1989年より1年間、中国人民大学中文系に留学。1989年から1991年まで北京に、2006年から2015年まで上海に滞在。